寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内
義家流之内新田流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (12)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

酒井

寛永諸家系圖傳

甲八

清和源氏

義家流

新田廉流

酒井

家仍、いとく新田義重の苗裔徳河親氏を三河に住し給ふ二子あり

やすしげ泰親を兄とし次男を

りゝ酒井氏と称して世家老たり其

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

板子孫繁昌若く家の法業をひらく

柔

左衛門尉

柔

左衛門尉　法名浄賢　道号愚玉

天文五年四月八日卒

柔

将監

永禄八年三野の城を引て豫州

しの方

女子

下小川若狭守書

女子

渡里久若湯書

女子

山器半左衛門書

忠次

小平次　小五郎　左衛門尉　左衛門督

利發して一箱こ与と

東照大權現より仕へ奉りつる

忠次軍功あり忠次が宮い

大権現の姨母なり是より後くしろ

川乃事をとけ給ふ

弘治二年尾州の兵字賀井の城と

りこみ攻もむる時

大権現加勢ありて忠次なるべし御潔代

の勇士等をたらして是をもとめ城

外におかく相たいひ也をいまし

ふ攻とく東田勝家殿とうかうり

ふ敵利とうしなひ久

大権現軍を出し給ひ忠次先陣

をうけたまはりすゆとゆふことなり

永禄五年九月廿九日八幡作脇の合戦

のゆきて忠次彩貴月をたらして軍功あり

同六年十月一向京都紀のゆきて百ケ日

計数十度の合戦して忠次先ゞけと

して毎度軍忠あり

同七年三月吉田の城をとるゝふ

同年秋三河の郡士と忠次が藤下に

けけるゝふの御書あり

元亀元年六月織田信長と朝倉義井と江州

姉川にて合戦乃ゆきて

大権現五千乃人数を引わく信長の加勢と

て出張の時忠次先ゞこうして朝倉と討

くゝ見ゝ屈ぶる

同三年十二月武田信玄三河味方原に出張の時

大権現義而ゝくゝまい出籠下の岩とりて

信玄の将山縣三郎兵衛尉ゝ岩湯をうちやぶり

ゝゝまゝゝゆゝゝ忠次ハ小山田備中と

甲斐国の山縣小山田ひきゐうぐこ
ゆ三所衆ゐうゐ武田から勝頼馬
場美濃守籠と馬をとめ馬をとらせく横
地といも信玄大軍をりきうい
来ゐ也
大将規のゐくさゐうぐきたもふを取
大将規二ふび相たゐん事を議し
たまふきき忠次と石川伯耆守く相
ゐうてものみをけりして敵陣と

うめぐりむ信玄陣と二所のゆぐりを
たいくきじくくゐをとるをけゐ
と乃くゐう忠次りはぐ信玄ゲ
使器固ゆして屈ぶりぐきことと
察ーてこもを
大将規ー言として表ら乃ゐを
いゐれいすゐうちやゐゐ
天正二年九月武田勝頼演相をお
うちんとて壱州まくお発ー天誅

川の邊より陣を
大控現七千餘の士卒小天龍の邊
より出て武田が兵天龍川の中に
馳せ入りて矢を放てみな来りて
忠次川の下にいそぎ出羽守と
事二十餘所
大控現是を見て彼と組まりて忠次と
やがて忠次出羽守を討ん為にて刈
るとて出羽つゐに
いろを新川をうつて敵陣に
けいとすれども武田が兵
こを見て是を見くいそぎすを
きうず勝利若と出羽守をれ
ども軍利にして足をうてけぬ
く軍勢を引つ組て忠
次に邊より出羽守へつゐ
大控現に渡りて忠次
義切いまだ勝負とは
働

忠次なんぢ敵うるすりをうす
屋し忠次いまゝの良将なりと感
じをまゝ
甲州より三州風来るゝ書をこ
ゝゝく書とゝゝくまゝしむ忠次
手紙を引かくこを面くいふして角
屋村を放火しれで敵共こをふ
ゝざけると忠次ら屋ぶりて敵数多
きりとる

同三年武田勝頼二万の兵ゝく三州ゝ
おゝ張ゝ
大猪現五子の士卒をゝく岩田呂陣を
ゝたまゝ付忠次ゝゝい敵い大軍
なりけゝゝ屋ゝず去ばゝく士卒
と岩田ゝ引ゝゝけて色ん
大猪現こゝをゝたまふゝ忠次ゝん
かゝして四人数を岩田ゝいまゝむ
武田ゝゝけ山縣ゝゝゝ来

と忠次るとう命して是とうちそうだけ
いくさと合して長田の所くいる盟日又
義事三度のうち忠次と山縣と二度
ことごとくせたくうと攻と張軍
いくさとんですやいこまとうち攻
武田が勢能所うちきゆる事いる
ますして軍とうくうち
同五月武田勝頼軍と出して長藤の
城とうこし

大将現行と水を後ぐのうめり本張
したまふ時勝頼うげうう澤川と
強く向原う陣とうう事二十余所
彼とうう事十三度
大将現忠次武多豊後守同年八月
命じて勝世久勝頼と戦
事うくうたまふ所ちう
出軍うず大利をたまふと忠次
ドていくたる計略いう屋きは

はときなりと長勝我が陣の後をえ
きりて葛葉山しの紙き敵陣をせむる
ならば長藤城中の兵いかをもく勝
我が古卒ハ氣をらなる
大指揮きらめる行くを長うば信長
こもりをとりこせ
忠次を信長へ行りりてうるの
おもむきをドうを長ハ行長大いら
て忠次むうハ智謀ありときてしに

いま海行くおろうなるや葛葉を
ゆうくなふの巻ゆうんと忠次右面
して長うぐを長行長忠次を果て
らうづゆくいたのうをいうハ
葛葉をとうハうを乾しいるまう
長を長をとうを絶ふして閉じ
屋門く敵のうをはうをこと
ゆく家前ハ門をいうきを長ハ
たを長をうりうこを長をうんや忠次

ぐ、きく被ゝ投地の業門をもつて検
使どうへゝ申ばる申ゆきくうろ屋
信長こゝ申とゝろ
後まゝ加後者とあいて忠次家
次又子陣而ゝ
巣ゝ

大将拠こゝ申とゝうゝく
松平周防守牧野郎新二て菅沼新八郎
七宮長ゝ兵衛孫九郎六ゝらの加勢

とけゝいゝこゝ警三千騎奥平監物
名義義八郎とゝの業門ゝて
五月廿一日のゝ付き書巣山ゝゝ
のゝてこゝ申をゝ城を和田兵部
お柿塚門をゝゝ
ゝいへども味方すやにそんで和
田とゝとゝ城をやきゝゝ武田勢
こゝ申ゝ乱をゝたい威をゝ
ゝず信長こゝ申と称美ゝて忠次

羅刀をとこまつ長沢さしおかく
大隅提忠次が鎗しゝ浜沖のときゝ仲の
羅刀と進らせ
大隅提幸列へ沖馬とおろれ二候とせあ
たまつ附沼軍勢をり撫来と出発ど
又急川しおもむきこまい沼防系乃
城と小りまきこ六月より八月までうこ
みたまつ夜襲城ととてこるり附
大隅提の勝せこの月て小山

とせるじ形ゝじ兄とかゝん忠次
ト さく沼防系ゝに没落の長
他石の城小もこまきけるくん
落下りたびん福ゝて軍を引
くゝ志ゝくく人馬と屋あたまくり
小山とりこみくゝ兄とおとさどんい勝
れ形しず浜沼とべしことけと
石川伯耆守松平周防守ホとんで
いくく 勝れを藤の級軍におれく

軍を出し事にて此つゐへ
て小山を出し
大指規こゝを
りおよび
こゝを
大井川に陣を
大指規ここを
また内藤
山路
引たまい
大指規志次軍
志次
こゝを
大指規と織
同六年武田小藤と渡辺黄
らんとゝ志次冨永
ゆくゆ
ゆく
敵
引
大指規志次
志次
こゝを
大指規と織
同六年武田小藤と渡辺黄

川し射陣せり附

大将現はいはしのけく光をうえん

こしたまふ忠次が、こく武田うち

こまをきうぐうれうずんし来る

ぐしこく敵国しうこうん本

ぶうぐ兵を引くうたた

まんぶいうあれとも

大将現ゆうたまうぐしてはかり

後列り四馬とひけらる忠次がト

さく来ハはしの出使し列をべうず

敵ぐし陣をく還御をまり屋

大将現ちくして豊田より兵をおう

てうたまふ附忠次ちんぐりを

大将現忠次り物せりハ泄がトハ

たみぐろをうすがごとくうまく

称美しまふ

同十年信長甲州し入武田が氏族

をわろぼしく泄のぐうとして後列

蒲原より壱刀流松ヶ浜のとき
大指規案中まく光とともに行ふ
信長忠次しうれりふ山度
徳川殿の強賞うあいまり山路丹後
当しいうまぐこと謝しうり
いまり、いり成、いまり威と天下にかふ
こしい中光　徳川殿乃多年武田
をおそうの切たりはしのうまふ
ちを信長流松とおく武田り

うう忠次武田の家代うの人強賞美
とけくせり附り代ちより真光の
太刀なしじり美金二百あとたまふ
この太刀今忠勝所持と

同年
大指規江刀安正おむしきく信長
渡たまふ附元山梅雪こと之
ぐふ忠次当代信長忠次当并
り市家人とうく行ちうり信長

者を引たまふこのち信長深
大指揮ものがりまゐまで完山用く
こまにいそぐふそれがらして
大權現和泉の陽しおもむきたまふ
六月二日信長明智光秀ごめに弑
せらる
大指揮おとろきたまいいきをぬき
て明智をうんやとおほせをを
忠次がトクろい今伏せいるとて西の
共をもれ伊賀路をあくゆ
ろうかさもくく大軍をおこし先を
せたまふ
大指揮こまにいそぐいたまふ
堀切おもむきたまふ酒井川
いろ忠次小舟一艘をもちわたしの
せたまふ忠次小鵜といふ
のり川をもふ伏せの人をふ渡
ゆく伊東の山中を戸ゆく伊勢の和

みにいぐ毋くのりて三列しつる
同年六月下旬
大将提甲列しつるたまい彰府の城し
おりゆきとき諏訪の祝部その城
を献ぜんとつるふより忠次し命じて
諏訪し廻りむ忠次三千余の人数を
引ゆく諏訪しむ出ぬる祝部
数日城をさつずいそふ小田原
へ加勢をとる小弟氏政百万の兵を率

して諏訪をとる忠次が士卒皆只
ちゐ大兵いつる屋うず表し入
をやうに兵を引くさる屋し忠次が
いくしい表し家を引さつば歌し
をいうれくこうくく花せんと表
いもげ小荷駄をえしく明日兵をい
つぐ軍全うん庶卒こをしさくぶ
翌日小田原の兵果しくいる忠次列
ぐうこを陣屋をやきく引退く

敵もかくまうと太次郎兵衛もうちけく先をかせぎそうしてとうて是
程と申し鉄炮をうちかけ敵
をうちひくをみるとき忠次もうちかくる
と申しくこもてをうちうぐく七里
乃百姓しをへ上事又六度
或い退き或いすみ或いすみ或い
けちらしく絶し軍と合て
世を繰引とつる

大猷院忠次が智略を感じたまふ
同七月小笠ゞ大軍甲州等御ふり
お張し彰府とおぶぐくく二十
余町十余日対陣をこを問り高嶋
三宅等小笠原伯とお戦て是を
屈ぶく氏政兵へ引て乃て是れを
忠次ニ是程をたうりく附こまを
おびやかをゆへ氏政たくふ事
いずく和をこい出をりくこ

大指規甲州信州の境を定め須松
りうたまふ同年信州十二郎を
忠次りたまふ後の四書りと
いへとも有りてくさくさ
同年冬
大指規の四姫を小笠原氏遠り嫁せ
めたまふもとくに吉日をえらび
大指規氏政と盟いをなしく系舎し
たまひ酒宴いろのとき忠次たまふ

り規もとくい川をまつ氏政悦のあま
是一文字の勝鬨とく貞宗の脇指をさ
げく
同十二年織田信雄と北條氏政と合
戦りおよぶ小きく
大指規信雄とくうん軍を
おしたまふて忠次り命ぜられ
八國家の安危はこの合戦りいとく
なんぢゞ計策ふる舎り忠次あ

て辞せどして下うく柔老辛しおよぶ
こいへどもつゐにけなき命をうしなう
べし他りゆゐ何ぞ屈きしらず忠次先
ゐうくむしろふなくむ百万の敵とつる
しかうくふたりどたりことを
わづらはしてるるず勝ゐと決せんかを
下と

同年三月十七日秀吉の先手森左衛
三千餘ゐく羽黒し陣し忠次

大指揮小下ゐうくふ左衛ゐづに三千餘
しく羽黒しゐ同ゐ三千餘つがゐし
して信長の附らこと名誉へふて
墨を屈ぶ作ときとぐぐ世こぐり
て羽左衛と稼と今又先ゐしゐ
後陣の作ぐぐさに生とうう
屈ぶん

大指揮こまをゆうたまふ必人忠次并
し張羽羽黒しむふ忠次辞卒と下

和して三方よりこまをせむ左馬さ
ゆき来りてすでに法列に引入る
前を切る事三百餘級
秀吉十万の兵を引わけ小口樂田二
重塚より出張し吉塚に陣をとる
味方こまをとりて軍をいどむ我
りんとして忠次あひ見て戒
士卒をはげまし、いさぎよく法列をはきて

兵粮をもつて運送をなすべし又
大樹秋より下りて今日は合戦あり屋
うすをはげまし人馬をやとはんこと友
いふてさつたまふ日ぶくに
来の剣をもぐ大軍を引わけ敵
をうつ言おもいくたらすす
ハ的将のせざる不なりこと秀吉武
勇をもぢあにまつぶくを見を
なるべけんや、ま陣を地形をう

事ハ和おとうまへ城とかうんぐるを也
こゝ引れば
大将攻のおぼしめしところも忠次がド
もにうぶいぶとなし感じたまふ
同廿月九日
大将攻出久手口進發ありて秀吉乃
出久手池田勝入毒庵と討かゝるを
附り石川伯耆守なりじり忠次ホ
く命じて小牧山とまもるし忠次

伯耆守にうゝ秀吉出久手の
敗軍と聞く驚き寄せ給ふ
味方のこい祝ふ面なりこの附二重城
とおうい次と陣屋をあらば
敵なすず敗北といれども伯
耆守見り出くがつぶ忠次軍勢と
おうんとなる附安三度りおうんて
伯耆ちり使とうかへど伯耆
ちうんくとまで忠次らうなく

していうをおさえ屋敷相
大指現こと也ときてたまいて忠次が忠孫
とうじたまふ
大指現と秀吉と和睦ありて出入後
のち忠次伝左と京のうち
秀吉より宅地をくまふ桜井の屋
敷と号し江州のうち水く
来地千石をもらうて京のま
ちい料しわくたまふ

来

寛永元年十月二十八日京都桜井の
屋敷をして卒し俗心と号し
下総国　忠次と別腹
姫路お家相続下総ちと号し

女子

西尾弾正妻　忠次と別腹

家次

小五郎　文門左衛門　左衛門尉

大猪規より伊達の家の子となる

七藤四郎義乃と文忠次より出る

ゑい菖蒲山しまく軍功

ありし

天正十四年四月十四日秀吉乃妹と

大猪規より嫁したまふ附秀吉より浅

野弾正忠と云へる三州濱松より

ゆきて家次出

大猪規の命をうけしまうてむい

しかあい遠中まくをうけ

ゆく

同十六年家督をいく若田の城

と領じ

同十七年 浪五位下に叙し
同十九年九月 長田と行ひ合下総
国雄井の城をまもり三方石と隙
ぐ
寛永五年 石田治部少輔 上方にて
謀反の時 太田三郎兵衛 結城
右流院殿 信州 太田 義伯 結城
左衛門 漆屋馬場壹 敵陣と御
渡し 治部 命じて 刈田 出る

時 太田安房守 足の士卒 来
る 家次 こと 討ち たぐ ち
といひて 追手の門 ぎ いる
城中の 兵 出 を 行 寄 死 庶
ぐ り 物 すぐに 城中 いん
と する 時 山 諸 より 使 名 ち
て げ ら い 大 物 の 下 知 な く
城 と せ ら こ と な ま て 見 り
ら 家次 兵 と 引 く 所

同九年雄井を以て三河の金子浦
の城を築き五万石を領す
元和元年夏四月七日大坂乗城の時
天王寺邊にて戦功あり
同三年高槻城攻落城後摂津国
の城〻十万石を賜る
同四年三月十五日江戸にて病
死五十又家督法名京光

康俊
継度助　武安氏を
大膳亮より出律の康乃字を
信之
高俊　小笠原氏を
久恒
松平甚三郎

はぐゝ三列福鎌しおしむき松平元
次郎ゝ舞ゝ行ゝ今ハ忠勝ゝ家老

忠知
因幡守

女子
松平外記伊昌ゝ妻

女子
牧野右馬允康成妻

忠勝
宮内大輔
寛永十二年
大膳亮
右浦院殿ゝ養子ゝ
同十四年正月廿三日 従五位下に叙ゝ

文閑左衛門尉
大坂安度の御陣に供奉
元和五年三月越後高田に
信州松城に
移る
同八年八月松城を
閑を領し十三万八千石を給
寛永三年九月浜田信濃守に
同九年六月筑後肥後守忠清罷
て庄閑に配せられ忠勝こまを
まうける時に二千石の地をまして
十四万石となる
重次
左兵衛 浜田信濃守
寛永七年三月十日三十五歳にて
死す 法名林清

忠重

長門守　定家卿ニ祖父の養子ト成

元和元年伏見ニ於テ

大御所

右徳院殿ヲ奉シ給フ

同三年十二月浜五位下ニ叙ス

勝長

大膳

元和二年

右徳院殿ヲ奉シ給フ

子次

玄蕃

寛永十四年五月十一日死ス

栄

家女　忠勝ガ家臣

元和九辛八月五日十六歳にて死ス

弟

民部　忠勝が家臣

寛永七辛五月廿八日二十二歳にて病死

女子

松平甲斐守妻

女子

水谷伊勢守妻

女子

内藤帯刀妻

女子

里見淡路守妻

女子
溝田十左衛門書

女子
忠勝ガ家老高力但馬ガ書

女子
松平能登守書

忠當
掃部

寛永四年十一月十三日
将軍家ヘ参ル

同十二月二十九日 従五位下ニ叙ス

忠俊
左近

家紋丸内鳩酸草　裏紋沢潟

国立公文書館
National Archives of Japan

須井

勝忠

小平太　生國三河　法名宗清

重元

七郎右衛尉　生國同所　法名宗安

康應大檀那ゝ法名ゝ御

重傷

大隅　出雲国人　生国同国

大隅はもと人にてまつりて軍忠あり

小よりの出仕歩と形り

天正十二年尾州長久手の陣のとき

出雲守と形りて数回しいさみ

[illegible]軍功をとげます

文禄元年三総の国山辺郡武蔵の

国埼玉郡しかるべく領地二千石を給

うのち出羽守と形り

関ヶ原の陣の軍功あり

大隅はこれを感じたまいて三州寺社

の地をたびうけ同心かくうち

二十五騎の出切米にて五千石の采

地をたまうり文武州勢田谷に

かゝく是迄七十人の山伏相とたまりて
そのゝち伏見山城乃山崎とつゝしむを
こゝ山籠なゝいゝ山馬ゝゝと給り
て御天守と、ゝつけらる給しいゝく
ゝ火薬のゝ中けらば重勝山籠山る
ゝゝとけぐ乃ゝゝゝ五歳円乃弦
ゝゝいゝ也ゝゝゝゝゝん士卒をけ
けゝく相州に伏見の城とゝゝる
ゝゝと長沼外蒲生郎ゝおゝく

山加藤子石の地をとゝまりて
けゝ付伏見の山城おゝく法安の大
将
大指規の山前ゝゝ列定して名誉の長
短ゝゝゝ勝負けゝ事とけゝ付
大指規の給ゝ長の誉ハ数度誉を
けゝゝく切けゝゝ先をゝゝべしと
てするゝゝ重勝をゝてたゝ也
ゝ也たゝゝ付こゝんゝゝけゝハ誉ハ

七月ニ大ク勝利ヲ得タリ
いめ〳〵より出て列座すること七度
寛七十八年五月伏見ニ於テ病死六
十又家　法名成慶

重正

石川　生国同国
石清水院殿ニ仕ヘ奉リ
寛七五年三枚京勝深数のとき

石清水院殿ニ奉リ宇都宮
ニ於テ戦死　武田四陣ニ伏
同八年十二月沼津ニ於テ病死二十七歳
法名　良永

右勝

伯耆守　五十六歳ニ死ス　法名楷山

政勝

作兵衛　生國武蔵

定勝

生藤八　生國同所

勝貞

名一郎　生國山城

實ハ酒井生右衛門次則が子なり勝貞
幼少の時次則病死す夜ゝ祖父重
傷を負ふ

寛永七年十二月なくなる

台徳院殿と称たてまつる

将軍家へ仕へ人となりまつる四小姓ぐみの
中番をなしむ

重之

作蔵人尉　生国伊勢

母八茂沢織部正がむすめなり懐姙乃中に父重正死去ゆへ遁生て祖父重勝方に育なり家督となる

寛七十四年八歳にして三列右京亮大猷現とあらたまりぬ

同十八年重勝死去の後重之幼少なるゆへ永井右京亮直勝山より言上ありて重勝の知地の内沼列ら三千石をまいる

元和元年十三歳にて

右遠院殿とあらたまりて翌年より

御小姓くみの御番をつとめあらたまる

御書院番となる

寛永十五年十二月
将軍家の命にしたがひて御書院番乃組頭
同十六年布衣をゆるす

重良
子乃
生母武州
母ハ久世三左衛門廣宣が女
寛永十年五月十二歳にて
将軍家にまみえたてまつる
同十六年十二月より御書院番となる
同十七年十二月御切米をたまはる

重頼
三次郎
女子
家従 剣鳩酸茶

国立公文書館
National Archives of Japan

酒井

元重

平兵衛　生國三州
多賀下野守伝えしつゝ

元俊

孫十郎　生國同州

[illegible]和泉守忠重につく
寛永十二年二月死

元次

[illegible]次右衛門　生國同前
寛永十七年より
東照大権現に奉たてまつり[illegible]五家
同十九年大坂陣に供奉する度
[illegible]院殿

将軍家に奉たてまつり天守の内[illegible]
[illegible]

家紋　[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

酒井

桑

作之右衛門　尾州人なり

定山梅雪ト法名

天正三年五月廿一日七篠ニ於テ討死

毛林　祥雲と号す

右次

作り右衛門　生国甲州　定山

定山梅雪子勝千代　勝千代死

玄の板古七家ハ父の好ましく

東照大権様へ仕人ニ成まつる段

右徳院殿と申たてまつる

寛永二年死去　法名禅法順文

右人

七右衛門　生国武州

右徳院殿と申たてまつる

寛永十年

将軍家へ仕人ニ成まつり小十人組と申

家紋　剣鳩酸草

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan